

パネルディスカッション 2 アレルギー研究の流れ

司会の言葉

多田富雄 (東京大学)

このパネルディスカッションでは、アレルギー研究の流れに直接参加し、しかも重要な役割を果たした5人のパネリストの参加のもとに、その流れをたどり発見の意義を振り返ってみようと思う。

最初の演者 Zoltan Ovary 教授は、1907年生まれで本年86歳。PCA反応の発見をはじめ数々の研究で知られるが、20世紀アレルギー学の歴史を自ら体現した碩学である。アレルギーの発見から今日にいたる流れをご自分の交友を含めて振り返る。

Fritz Melchers 教授は、バーゼル免疫研究所の所長。初期の日本の細菌学、免疫学、アレルギー学の研究は、ドイツとの緊密な交流によって生まれた。その歴史からはじまり、今日における研究協力にいたる流れを説いて、未来につなげる。

木村義民博士は、故中村敬三先生が会長となって第1回日本アレルギー学会が昭和27年(1952年)に開催されたときから、日本の基礎アレルギー研究の中心におられ、この学会の発展を常に導いてきた。今回は、日本におけるアレルギー学の黎明期から、今日の隆盛にいたる道のりを豊富な資料で示してくれる。

日本のアレルギー学の成果を世界に示した人たちは数多いが、石坂公成・照子夫妻のIgEの発見とその後の研究の展開は、何ととっても世界に誇る大成果である。アレルギーの原因抗体としてのIgEの報告は1966年のことで、その発見はIgE myelomaが見つかる1年も前のことである。当時、デンバーの小児喘息研究所でリサーチフェローをしていた私は、石坂博士夫妻の血のにじむような研究を目の当たりにした。IgEの発見は、やがてIgEによるメディエーター遊離の細胞性機構やIgE産生における細胞間相互作用、それに関わるサイトカインの発見、炎症反応としてのアレルギーの位置づけなどにつながっていった。今回は、石坂夫妻それぞれから、IgE発見にまつわる秘話や、その後の研究の流れなどをお話しいただく。

アレルギー研究の流れは、まさしくひとつのドラマであった。その感動を皆様と共有したい。